

辞令は恋のはじまり

プロローグ 王子様と悪魔の契約

——どうか、全てが悪い夢であってください。

八月最後の月曜日、心の中でそう祈る牧瀬彩羽は、ふらつく体を支えようと壁伝いに廊下を歩いていた。

その時、ふと掲示板に貼り出されている辞令書を見つけて、頬を引き攣らせる。

「そんな……」

たった今内示を受けたばかりなのに、もう辞令が張り出されているなんて。

総務部 牧瀬 彩羽様

株式会社トキコケ

代表取締役社長 常葉忠継ときはただつぐ

本日付で総務部の任を解き、明日より新規開発販売促進部 部長の勤務を命じます。

こうして貼り出された辞令書を目にしても、さっぱり実感が湧かない。それどころか、自分が悪い夢の中にいるのではないかと思ってしまう。

というより、夢であって欲しい。

そう願って頬を摘まむ彩羽の様子を見て、通りすがりの社員が「えっ！ この子なの？」「見るからに無理じゃない？」などと囁き合う声が聞こえてくる。

彩羽は心の中で「そのとおりでございます」と力強く頷きつつ、がっくりとうなだれた。

心身共に感じる痛みから、やっぱりこれは現実なのだと思い知る。

彩羽は恨めしい思いで今降りてきたばかりのエレベーターを振り返った。



今日、いつもどおり出社した彩羽は、突然、二十三階にある社長室に呼び出された。

あり得ない場所からの呼び出しに、一瞬「クビ」という言葉が頭をよぎる。だけど、クビになる理由がまったく思い当たらない。

国内外に根強いファンを持つ時計メーカーであるトキコクに入社して三年。彩羽は、目立たず真面目に仕事をしてきたつもりだ。社員数の多いこの会社で、ただの事務員一人をクビにするために、わざわざ社長室へ呼び出したりしないと思うけど……

——クビは、嫌だな。出来れば転勤もしたくない。

そんなことになれば、憧れの王子様と会えなくなってしまう。会うといっても、彩羽が一方的に眺めているだけなのだが。

戦々恐々としながら社長室をノックすると、すぐに社長の息子であり、社長秘書である常葉圭太がドアを開けてくれた。

「ああ、来たか」

彩羽を出迎えた常葉秘書の声に、本能的な部分で不快なものを感じる。だけど、彼の顔の造りは憧れのあの人にどこか似ていて、つい目がいつてしまう。

「待っていたよ」

社長室の奥で人の動く気配がした。視線を向けると、現在のトキコクの社長である常葉忠継が席を立ち、彩羽の方へ近づいてくるのが見えた。

親しげな笑みを浮かべている忠継社長にも、何故か圭太に感じたのと同じ不快感を覚える。

「……遅くなりました」

湧き上がる不快感を抑え、彩羽は社長に向かって会釈した。促されるまま部屋の中に入ると、圭太がドアを閉める。それを合図に、忠継社長がパンツと手を打ち鳴らした。

「おめでとう」

「……？」

——おめでとう？

にこやかに両手を広げる忠継社長に、彩羽は戸惑った視線を向ける。

「この度新設する新規開発販売促進部を、君に任せたい」

「はい？」

話が呑み込めずキョトンとする彩羽に、内容を噛み砕くように、ゆっくりとした口調で忠継社長が言った。

「君を、これから新規に立ち上げる部署の、部長に、任命したいんだよ」

「はいっ？ ……はいっ!？」

一瞬遅れて言葉の意味を理解した彩羽は、わけがわからなくなる。

呆然とする彩羽に、戸口に立つ圭太が「おめでとう」と、どこかバカにした口調で拍手を送ってきた。



それから約一時間、彩羽は必死に部長就任の話を断り続けた。

とりあえず「保留にするから考えてみて」と宥められ、社長室を出てきてみれば——すでに辞

令が貼り出されているではないか。

途方に暮れた表情で辞令を眺める彩羽は、自分というものについて考えてみる。

身長百六十センチ。痩せている方ではあるけど、取り立ててスタイルがいいわけではない。目立つのが苦手で、いつもゆったりした服を着てメイクも最低限。癖のあるセミロングの髪を一つに纏めただけの地味な装い。本当にどこにでもいそうな、普通のOLだ。

当然、バリバリ仕事をこなすキャリアウーマンではない。

名門大学を卒業したわけでも、経済学を学んだわけでもなく、私立大学の文学部を平凡な成績で卒業して、就職後はずっと総務部で事務処理をしてきた。

そんな彩羽が、なんでいきなり部長に!?! しかも明日からの勤務が命じられているなんて。

こんなの騙し討ちもいいところだ。

「以上って……」

そんな短い言葉で、自分の行く末を片付けられては困る。

「あり得ない……」

ショックで目眩がしてくる。壁に両手をついて体を支えていないと、そのまま倒れてしまいうだ。

誰か私を救ってください。そう祈る彩羽の肩を、誰かがそっと叩いた。

優しく肩に触れる手に、藁にもすがる気持ちで振り返る。次の瞬間、彩羽は盛大に顔を引き攣らせて硬直した。

「……っ！」

「大丈夫？」

彩羽に気遣わしげな視線を向けるのは、細身のスーツを上品に着こなす男性だった。長めの前髪を無造作に後ろに流すことで意思の強そうな眉がよく見える。気品を感じる風貌なのに、どこことなく野性的な雰囲気も感じる。

香月湊斗——彼の名前を、この会社で知らない人はいない。

それは彼の非常に整った容姿であつたり、高学歴で仕事ができることだけが要因ではなかつた。前社長の孫である彼は、つい最近までこの会社の次期社長と目されていたからだ。

しかも彩羽にとつて、湊斗は憧れの王子様なのであつた。

——憧れの王子様は、間近で見てもやっぱり完璧な美しさだな。

呆然としつつも、頭のどこかでしみじみとそんなことを考えてしまう。

おまけに、至近距離にすることで、彼の纏うフレグランスの香りをリアルに感じて、なんだか胸が苦しくなってくる。

息苦しさを堪えて湊斗に視線を向けると、彼は目の前の掲示板をじっと見ていた。

不思議に思つて改めて辞令の方を見ると、自分の辞令の隣にもう一枚、紙が貼り出されているのに気付く。その書面を見て、彩羽は再度、心の中で『あり得ないっ！』と、叫ぶのだつた。

彩羽の辞令の隣には、新設される部署に配属される四人の社員——つまり、彩羽の部下になる人たちの名前が書かれている。その中に、香月湊斗の名前があつた。

つまり、彩羽が、彼の上司になるということで……

「あの……これは、なにかの間違い……で……、私、その…………」

自分が彼の上司になるなんて、なにかの間違いだ。湊斗だつて納得するはずがない。

——さつき社長室で打診された時だつて、全力で断つたんです。

——香月さんが私の部下になるなんて、知らなかつたんです。

そう伝えたいのに、焦つて言葉が出てこない。

どうにか気持ちを伝えようと、湊斗の目を見て必死に首を横に振る。

そんな彩羽を見つめ、湊斗がフツと表情を緩めた。

その艶やかな表情に、つい状況を忘れて魅了されてしまう。

思わずぼかんと見惚れている彩羽に、湊斗が口を開いた。

「君が俺の上司になるんだね」

そう言つて、湊斗は二重の切れ長の目を優しく細めて微笑んだ。誰もが見惚れずにはいられない完璧な王子様スマイルだけど、なにかが胸に引っかかる。

——なんだか胡散臭い……？

いぶかる彩羽の視線をかわすように、湊斗が清々しい微笑みを浮かべたまま言う。

「これからよろしく」

その表情は一見、優しげで魅力的に感じる。でも、その瞳からは、彼の感情がまるで感じられない。

「お、お願いします……」

どこか緊張しつつ彩羽が頭を下げると、湊斗が右手を差し伸べてきた。

「俺に出来ることがあれば、なんでも言ってください。全力でサポートさせてもらいます」

「……」

この手を握り返せば、憧れの王子様と一緒に仕事出来る。でもその代わりに、二十代女性の管理職という身の丈に合わない職務を背負うことになる。

憧れの王子様と一緒に仕事をする 것도、管理職に就くことも、本来の彩羽の日常ではまずあり得ない出来事だ。

身動きできない彩羽を急かすように、湊斗が微かに手を動かした。

この手を拒めば、この人に近付けるチャンスなんて、もう二度と訪れないだろう。それはそれで、後悔しそうな気がする。

——リスクを承知でチャンスを掴む。まるで悪魔の契約書だ。

だけど、目の前に差し出された彼の手を拒める人間などいるのだろうか。

窮地に追い込まれると、逆に開き直ってしまう性格の彩羽は、悪魔と契約を結ぶ覚悟で腹を決める。

「ありがとうございます」

はつきりとそう言って、彩羽は湊斗の手を握り返すのだった。

1 ようこそ新規開発販売促進部へ

翌日、彩羽は辞令に従い重い足取りで新しい部署へ向かっていた。総務部で使っていた私物を入れた段ボールを抱えて、エレベーターに乗り込む。

二十階のボタンを押し、ため息を吐いた。まさか自分が十階より上の階に異動する日が来るなんて考えたこともなかった。明確な規定があるわけではないが、社内で重要なポジションほど上層階の部屋を与えられる傾向にある。

彩羽が部長を務める新しい部署は、二十階の一室が用意されていた。

二十一階から上は、会議室や重役室が占めているので、一つの部署に与えられるものとしては最高クラスの扱いと言えるだろう。

昨日まで十階の総務部で働いていた自分が、何故いきなりこんな待遇を受けるのだろうか、一晩経った今も不安で仕方ない。

しかも憧れの王子様である湊斗と、一緒に仕事をするようになるなんて……

「……」

彩羽は、ふと自分の左手首へと視線を向ける。

今は腕時計をしていないが、入社当時は古い腕時計を巻いていた。

その時計を思い出すと、自然と初めて湊斗と出会った日のことを思い出す。あれは、大学四年生の時の企業面接。

あの時の彩羽は、湊斗を時計の国の王子様のようにだと思ったのだ。



——王子様のようにだ。

時計メーカー「トキコク」の新卒者採用面接。気を引き締めなくてはいけない場面だというのに、彩羽は面接官の一人を見てそんなことを思った。

細身のスーツを上品に着こなす彼は、際立って端正な顔立ちをしていた。

年齢はもちろん彩羽より上だけけど、それでも他の面接官より格段に若い。それもあって、目に留まったというのもあると思うけど、それだけでは片付けられない存在感が彼にはあった。

それが、湊斗だった。

当時の彩羽が就職先に望んでいたことはただ一つ、安定企業であること。そして、出来れば地道にこなせる事務職がいいと思っていた。

そういう意味で、百年近く続く、国内に止まらず海外にも根強いファンを持つ時計メーカー「トキコク」の事務職は、彩羽の希望を十分に満たしていた。

志望理由や学生時代に頑張ったことなどひととおり話し終え、試験も終盤にさしかかった時、面

接官の一人が「なにか質問はよろしいですか？」と、湊斗に尋ねた。

——この人、一体、何者なんだろう？

彼より確実に年上の面接官が丁寧な言葉遣いで話しかけている様子に、つい首をかしげてしまう。湊斗が少し考えるようにした後、彩羽に視線を向けてくる。

初めて真っ直ぐ向き合った湊斗の視線に緊張して、思わず必要以上に背筋を伸ばしてしまった。

するとそんな彩羽の動きを見て、湊斗が口元だけで静かに笑う。

「そうだね……もしウチが女性向けの腕時計を作るとしたら、どんなものを作って欲しい？」

「女性向けの、時計ですか？」

そう問われ、彩羽は顎に手を当てて真剣に考える。そして「一生見ている飽きない、そんな時計が欲しいです」と答えた。

「一生見ている飽きない時計？」

「はい」

「それはどんな時計かな？」

湊斗とは違う面接官に問いかけられ、彩羽は言葉に詰まってしまふ。

面接がほぼ終わり、油断していた時に投げかけられた質問に、ふと思ひ浮かんだことを答えただけだった。なので、具体的なビジョンなどあるわけがない。

——それでもなにか答えなくちゃ……

「えっと……裏側が透明になっていて、内部の構造が見える腕時計はどうでしょうか？ 時計の内

部構造を見ていると、ワクワクしませんか？ なんとというか……時計の中に自分だけの宇宙があった、それを独り占めしているような満足感があります」

「後ろが透明……って、シースルーバックのことかな？」

別の面接官が言う。

「……しまった……。シースルーバックなんて単語、知らない。」

時計メーカーの企業面接を受けておきながら、基本的な時計の知識も持っていないと、自ら露呈してしまったようなものだ。

もちろん、発した言葉に嘘はない。時計の規則正しい動きを見ていると、ワクワクするのは本当だ。

だけど、どうしてそう思うのかを上手く言葉で説明することができない。

内心で焦り始める彩羽が、視線を彷徨わせると、湊斗が口を開いた。

「手軽に宇宙を独り占めできるなんて、幸せだね」

「……これは落ちたかもしれない……」

静かに頬を引き攣らせる彩羽に、追い打ちをかけるように面接終了が告げられた。

内心で落胆しつつ、彩羽が一礼して立ち上がった時、彼女の左手首をなにかが滑り落ちていった。不思議に思って視線を向けると、コトンツと、小さな音を立てて腕時計が床に落ちた。

「すみません」

小さく詫びて落ちた時計を拾い上げる。すると、細い金属を編み上げたようなデザインのベルト

が途中で切れていた。

「あ……」

「……これは、いよいよ縁起が悪い。」

まだ退室していないことも忘れ、ベルトの切れてしまった時計に肩を落とす。そんな彩羽に「見せて」と、声がかけられた。声のした方を見ると、湊斗が自分の方へ手を差し伸べている。

「えっと……」

一瞬どうしようかと思っただけど、きつともうこの会社は落ちただろう。そう割り切って、彩羽は湊斗へ歩み寄り、ベルトの切れた時計を差し出した。

時計を受け取った湊斗が、それを観察しながら聞いてくる。

「古い時計だね。ネットで買ったの？」

「祖母から譲り受けたものです」

この時計は祖母が若い頃に使っていたものだ。子供の頃の彩羽が、その時計を欲しがっていたことを覚えていた祖母が、大学合格のお祝いに譲ってくれたのだった。

古くて傷だらけの時計だけど、彩羽にとっては、ここ一番のお守りのような存在なのだ。

「そうなんだ。プラスチック風防の手巻きムーブメント……。七十年代か、それより少し前のものかな？ メッシュベルトは寿命だね……」

時計を隅々まで観察しつつ湊斗が呟く。

「古い時計ですけど、なんとなく愛着があつて……」

ノーブランドの中古品かもしれないが、自分にとつては大切な時計だった。けれど、大手時計メーカーの面接に、古いプラスチックの時計をしてきたことを、責められているように感じて小さくなる。

「細かい傷がたくさんついている」

「すみません」

説明のつかない恥ずかしさから、思わず謝ってしまう。

「この傷は、常に身につけていることで、自然につく傷だよ」

優しい声に顔を上げると、穏やかに微笑む湊斗と目が合った。

彩羽の目を見つめて湊斗が言う。

「浅く細かい傷は、アンティーク時計の勳章だよ。ずっと君たち家族に寄り添ってきた証拠だ」

「……」

その言葉に、彩羽の心に温かな思いが灯る。

湊斗は慈しむように傷だらけの腕時計を指で撫でると、スマホとペンを取り出し近くにあった紙へなにかを書きつけた。そしてそれを彩羽に差し出してやる。

「ここなら、壊れたベルトを直せるかもしれない。もし直せなくても、違和感のないものに交換できると思うよ」

「え……」

差し出されるまま紙と時計を受け取ると、そこにはお店の名前と住所が書き込まれていた。

「愛着があるなら、なるべくそのまま使いたいでしょ」

湊斗が優しく微笑む。その微笑みに自然と頬が熱くなった。

「ありがとうございます」

まるで王子様のようにだと思った湊斗は、本当に優しく素敵な人だった。自分には、決して手の届かない人だとわかっていても、彩羽の心臓が彼を思っただきく跳ねる。

その時、面接官の一人が「では今度こそ、これで……」と、面接の終わりを告げた。

それから数日後、トキコクから採用通知が届いた。それを見た瞬間、自分でも驚くほど嬉しかったのは、王子様みたいな彼にまた会えるという気持ちがあったからだ。

そうして彩羽が、トキコクの総務部で働くようになって三年。備品の管理や会社内外の連絡調整などの雑務をこなしてきた。

目立たない部署で地味に仕事をしていた彩羽でも、三年もいたらそれなりにトキコクの内情は耳に入ってくる。

湊斗が、昨年亡くなった前社長の孫であることも就職してから知ったことの一つだ。

嫁に出た娘の子供ということで、社長とは苗字が違うのだという。

あの頃の湊斗は、海外留学を終え、社長秘書としてトキコクに就職したばかりで、社会勉強として面接に参加していたらしい。

つまり、あの日彩羽が感じた「王子様」という印象はあながち間違いではなかったということだ。また湊斗に会えるかもしれない——そんな期待もあってトキコクに就職したけれど、総務の一社員と、社長秘書である湊斗の間にそう簡単に接点が生まれるはずもなく、日々は過ぎていったのである。

それでも、なにかの拍子ひょうしに社長に同行する湊斗の姿を見かけることがあった。遠目で見る彼は、いつも強気で迷いのない表情をしていた。

将来的に湊斗がトキコクの社長の座に就くと噂されていたので、その凜々りんりしさに見惚れると同時に、社員として誇らしいものを感じていた。

時折、廊下を移動する社長が足を止め、かたわらを歩く湊斗になにかを問いかける姿を見かけたことがある。湊斗がすぐにその答えを返すと、社長はなんとも満足げに頷いていた。その表情から、前社長がどれだけ湊斗に信頼を寄せているか伝わってきたのを覚えている。

しかしその前社長が、去年の春に心筋梗塞しんきんこうそくで急逝きゅうせいしてしまったのだ。それによって湊斗を取り巻く状況は、大きく変わってしまった。

前社長の後を彼の息子であり、湊斗にとっては伯父にあたる常葉忠継が継いだ直後、湊斗は社長秘書を降ろされてしまった。そして忠継社長は、留学を名目に海外で気ままに暮らしていた息子の圭太を社長秘書に就任させたのである。

役職を失った湊斗が、今後どうなるのかということは、よく話題になっていたのだが……
——それが、なんだって私の部下になるのだろうか……

彩羽はまだ、その事実が信じられずにいた。



二十階でエレベーターを降りた彩羽は、ため息を吐きつつ重い足取りで廊下を進む。

「新規開発販売促進部」という真新しいプレートが掲げられた部署の前で足を止めた。そして彩羽はスーツの胸ポケットから、古びた腕時計を取り出す。

祖母から譲り受けた時計は、あの後もベルトを直して使っていたのだが、いつの間にか壊れて動かなくなってしまった。それでもここぞという時には、お守り代わりに持ち歩いている。

彩羽は荷物を片手で持ちながら、祖母の時計をぎゅっと手のひらに握り込む。
その手を額ひたに当てて、新しい部署で頑張れますようにと祈る。

この状況は、はつきり言って自信がない。トキコクに三年勤めたことで得た知識はそれなりにあるけれど、平社員がいきなり部長なんて、初めから無理な話なのだ。

——自分にも、なにか出来ることがあればいいのだけれど。

そう祈りながら、時計をポケットにしまう。そして彩羽は、ドアを軽くノックして、返事を待たずにドアを開けた。

「おはようございます」

「お待ちしてました」

すぐに、落ち着きのある声が聞こえてきた。

その声に導かれるように視線を向けると、広く明るい部屋にはすでに四人の先客がいた。

一人は湊斗。あと三人は初めて見る顔だ。

中肉中背で縁の細い眼鏡をかけた白髪の年配の男性。その隣にも、眼鏡をかけた男性がいる。こちらは、レンズの下部だけにフレームがあるアンダーリム型の眼鏡をかけた、ヒョロリとした長身の男性だ。髪も黒々としていて、年配の男性とは親子ほどの年齢差を感じる。

残る一人は女性で、彼女だけ三人から距離を取り、デスクに座ってなにか書類に目を通していた。化粧つ気がなく、長い黒髪をお団子状に纏めて前髪をピンで留めている。きりつとした黒縁眼鏡をかけている彼女は、女子というより女史という表現がしっくりくる雰囲気だ。

——なんだか、眼鏡率の高い職場だな。

思わず、そんなどうでもいい第一印象を持ってしまおう。

「牧瀬彩羽です。よろしくお願ひします」

彩羽が挨拶をすると、それぞれが会釈を返してくれた。

年配の男性が「部長のデスクはそこになります」と、日当たりのいい奥の席を示す。その声で、さつき部屋に入ってくる時に聞こえた声の主が彼だったのだとわかる。

彩羽がデスクに荷物を置くと、年配の彼が代表してその場にいる人たちを紹介してくれた。

年配の彼は友岡博光といい、長年技術開発関係の部署で働いており、前社長が健在だった頃、湊斗と一緒に仕事をしたことがあるのだという。

もう一人の男性は、水沢学、三十歳。旧帝国大学の一つをトップの成績で卒業した秀才で、部署

は違うが友岡と同じく技術畑にいたそうだ。そしてきっちりした印象の彼女は、新島桐子、二十八歳。帰国子女で英語が堪能なのだとか。その語学力を買われて、これまでは海外とのやり取りが多情報技術部に籍を置いていたらしい。

「すごいですね」

彩羽がそれぞれの経歴に感嘆の声を上げると、たちまち桐子に睨まれた。

「どこがっ！」

攻撃的な桐子の声に思わず肩を竦める。そんな彩羽に、勢いよく立ち上がった桐子が足早に歩み寄り、思いつきり彩羽の机を叩いた。

パンツと、乾いた音が部屋に響く。突然のことに驚くより、彼女の手のひらが痛くないか心配になっってしまう激しさだ。

しかし桐子は、手の痛みを訴えることなく「それ、嫌味ですか？」と、彩羽を睨みつける。

「嫌味って……本当に皆さん、私なんかよりすごい経歴で……」

戸惑う彩羽に桐子は「それが嫌味なんです」と、声を絞り出す。

「ここにいる誰もが、貴女より年齢も学歴も高い。それに、貴女より長くこの会社に勤め、それぞれの部署で実績を積んできた人間ばかりなんです。そんな私たちが、貴女の部下になる気持ち、わかりますか？」

「……」

強い口調で詰られて、改めて桐子たちの心境に思いが至った。

経歴も実績も、自分の足元にも及ばない彩羽が、部下となった桐子の経歴をのほほんと呼び賞した
りすれば、そりゃあ腹も立つだろう。

気持ち収まらない様子の桐子は、今度は湊斗に視線を向けた。

「誰にでも出世のチャンスを与えるため設立される部署だなんて言われていたけど、蓋を開けてみ
たらどうよっ！ 前社長が亡くなってからずっと邪魔者扱いされている貴方に、定年間近の友岡さ
ん。前の部署でミスをして会社に多大な損失を出した水沢君。……全員、会社にはいらぬ存在
ばかり。しかも仕事内容は、前社長の負の遺産処理ときている！」

湊斗を指さし、桐子がヒステリックに怒鳴る。その勢いに彩羽は、ただ気圧されてしまう。

——負の遺産処理……、香月さんが邪魔者扱い……？

思いもしなかった言葉に、彩羽は必死に自分の知る情報を整理する。

この新規開発販売促進部は、前社長が取り組んでいたプロジェクトを進めるために新設された部
署だと聞いている。

前社長と現社長の経営方針が違うのは、総務にいた彩羽にも感じられた。それに、社長秘書から
降ろされた湊斗の進退について、皆が噂していたことも。けれど、現社長にとって湊斗は身内であ
るし、秘書として前社長の仕事を支えてきた会社にとって必要な存在ではないか。

それなのに社長の残したプロジェクトを負の遺産と呼び、湊斗を邪魔者扱いするこの状況はなん
なのだろうか。

わけがわからず視線を彷徨わせると、神妙な顔をしている湊斗が目に入った。その表情から察す
るに、桐子の発言は彼女の一方的な思い込みではないのかもしれない。

「初めから社長は、この部署になんの期待もしてないのよ。それどころか、プロジェクトが失敗す
ればいいと思っているんじゃない？」

「それはさすがに……」

そこで初めて、ずっと黙っていた水沢が口を挟もうとした。

しかし、すかさず桐子に「負け組は黙っててっ！」と怒鳴られ、首を竦めて黙り込む。強く否定
しないところを見ると、彼が会社に損失を与えたという話は事実なのかもしれない。

桐子は再び彩羽に鋭い視線を向けてきた。

「貴女が部長に選ばれたのだから、無力で失敗しそうな人なら誰でもよかったからよ。それがたま
たま貴女ただただなんだから、上司面しないでくれるっ！」

「……っ」

厳しい桐子の言葉に、彩羽はグッと唇を噛む。

悔しいが、桐子の言い分には一理ある。

彩羽自身、何故自分がここにいいのか納得できていない。自分が、湊斗はもとより他の三人より
優れているなにかを持っているとは思わない。

それでも、ここまで辛辣な言葉を投げかけられると、少なからず傷付くわけで。

黙り込む彩羽の視線の先で、桐子は彩羽以上に悔しげな表情を浮かべて呟いた。

「……なんで私が選ばれなきゃいけないのよ」

さっきまでの勢いが嘘のような、桐子の弱々しい声に驚く。

「なんで私まで、負け組の中に入れられなきゃいけないんですか？」

「それは……」

彩羽自身、この状況がよく呑み込めていないのだ。悔しげな顔をする桐子に、咄嗟とつさにかける言葉が出てこない。すると、ドアの方から突然、声がかげられた。

「誰でもよかったから、君が選ばれただけじゃない？」

驚いてドアの方を見ると、現社長秘書である常葉圭太が胡蝶蘭ごちょうらんの鉢を抱えて立っていた。

ノックもせずに部屋に入ってきた圭太は、室内を見渡しして薄く笑う。

昨日社長室で会った時もあったが、湊斗の従兄弟いとこだけあって、圭太もそれなりに整った顔立ちをしている。なのに、湊斗のような魅力を感じない。それはきつと、彼が醸かし出している軽薄な印象のせいだろう。

圭太と一緒に仕事をした社員が、彼のことを「軽薄の圭太」と陰口を言っていたのを思い出した。そんな圭太は、室内をぐるりと見渡し意地の悪い笑みを浮かべる。その笑い方だけで、彼が彩羽たちを見下しているのが伝わってきた。

——なんか、失礼な人……

自分の力不足は確かに否定しようがない。それでも、桐子に頭かぶごなしに否定された上、圭太からここまであからさまに見下されると、さすがに悔しくなってくる。

静かに眉を寄せる彩羽に視線を向け、圭太が口を開いた。

「社長より、牧瀬部長にお祝いの品をお届けにまいりました」

懇勤いんけんぶれい無礼——そんな言葉がピッタリな口調で話す圭太は、邪魔そうに鉢を軽く揺らす。それを見て、友岡が素早く鉢を受け取った。

「史上最年少の部長就任、おめでとございます」

「……ありがとうございます」

感情のこもっていない祝辞に、一応のお礼を返す。圭太はそんな彩羽を鼻で笑い、湊斗へと視線を向けた。

「お前の力量が試されるな。ちゃんと部長を補佐しろよ」

そう話す圭太は、チラリと彩羽を見て「まあ、無理だろうけど」と、蔑あやむみの声を漏らす。

圭太のその態度に、彩羽はギリリと奥歯を噛んだ。

確かに今回の部長昇進は、自分でも分不相応だと思う。でも、それを決めたのは、圭太の父親である忠継社長であり、彩羽が望んでこうなったわけではない。

それなのに、理不尽に見下された挙げ句、彩羽の力量不足は、まるで湊斗に責任があるような言い方にカチンときた。

大体桐子の、ここにいる全員が負け組のような言い方にも納得がいかなかったのだ。

——なんだか腹が立ってきた……

彩羽は、おもむろに「お言葉ですが……」と、圭太に声をかけた。

その声に、まだなにか言おうとしていた圭太が彩羽を見る。
 「私を部長に任命したのは社長です。私の力量が足りないかと仰るのであれば、それは選んだ社長に見る目がなかっただけで、香月さんに責任はありませんよね」
 「なに!？」

湧き上がる怒りを抑え、ゆっくりと話す彩羽の言葉に、圭太の片眉が吊り上がった。だが、彩羽はそれに臆することなく言葉が続ける。

「昨日社長室で、私が必死に部長昇進を断っている姿を、常葉さんは見ていましたよね？ それをどうしてもと、押し切ったのは社長です。そのやり取りも、見ていましたよね？」

「ああ……」

彩羽が強い口調で確認すると、圭太が渋々といった様子で頷いた。

それを確認した彩羽は、はっきりと断言する。

「つまり、私がなにか仕事に支障を来した場合、能力不足を承知で私を部長にした社長の責任ということになると思いますが？」

彩羽の物言いに、圭太の頬がひくひくと痙攣する。

「負け組が、生意気なこと言うなっ！ 大体お前、女のくせに、男に口答えするんじゃないよっ！」
 怒鳴る圭太に、いよいよ怒りが抑えられなくなる。

女は男に意見する権利がないというのか。そのあまりに時代錯誤な発言に、目眩を覚える。

——そもそも、怒鳴れば女が黙って言うことを聞くとも思っているわけ？

それならなおさら、ここで黙るわけにはいかない。

彩羽はぐっと顔を上げ、睨みつけてくる圭太の目を真っ直ぐに見返して言った。

「負け組ってなんですか？ ここは学校ではないので、組なんてものは存在しません。ここは新規開発販売促進部という社長の命で新設された部署であり、ここにいる全員が社長に選ばれたトキコクの社員です」

「なっ……っ」

彩羽の反撃に、圭太がわずかに怯む。

チラリと周囲に視線を向けると、彩羽が言い返すと思っていなかったのか、友岡だけでなく桐子や水沢も驚きの表情を浮かべている。ただ湊斗だけは、どこか楽しげに見えた。

その表情に背中を押された気がして、苦い顔をする圭太に向かって言葉が続ける。

「大体『負け組』って、なにに対する負けですか？ この部署は今日立ち上げられたばかりで、なにかと勝負するのはこれからです。それになにと戦うのかよくわかりませんが、私たち絶対に負けませんのでっ！」

これでクビにするなら、クビにすればいい。もしそうになったら、どこかに訴えてやる——そんな覚悟で、彩羽は圭太に言い切った。

それでも腹の虫がおさまらず、彩羽は桐子に怒りの矛先を向ける。

「それから新島さんも、勝手に『負け組』とか言わないでください。自分で自分を『負け』って決めたら、たとえ勝負に勝っても、勝ったことに気付けなくなりますよ」

勢いのまま桐子に言い聞かせる。彩羽の剣幕に気圧されたのか、桐子が目を丸くしたまま「すみません」と謝った。

彩羽は、再び圭太へと視線を戻す。それに怯んだ圭太が、湊斗を睨んで怒鳴った。

「お前、部下にどんな教育してんだよっ！」

そんな圭太に、笑いを囁み殺しつつ湊斗が言い返す。

「生憎と彼女は私の上司ですので。もし、なにかご意見があるようなら、彼女を部長に任命した社長にお願います」

さっきの圭太の慇懃無礼な物言いをそのまま返す湊斗の姿に、圭太が怒りを露わにした。

「お前がこの会社でそんな口が利けるのも、あと少しだからなっ！」

——それはどういう意味だろう？

疑問に思う彩羽の前で、友岡が湊斗と圭太の間に割って入る。

「まあ今日は、牧瀬部長の就任初日ですから……」

この場は怒りを取めてくださいと、温和な口調で友岡が取りなす。それで少し冷静さを取り戻したのか、圭太は背筋を伸ばし乱れてもいないスーツの襟を整えた。

そして彩羽と湊斗を見比べてフンツと鼻を鳴らす。

「でかい口叩いていられるのも今だけだっ！ なにを言ったところで、賭けの条件は変わらないんだからな」

そんな捨て台詞を残して圭太が部屋から出て行った。その瞬間、緊張の糸が切れた彩羽は、その

場にしゃがみ込んだ。

「大丈夫ですかっ？」

さっきまで彩羽に攻撃的な態度を取っていた桐子が、慌てて彩羽に駆け寄ってくる。

彩羽を気遣う桐子が床に膝をつくとき、そんな二人の側に他の三人も集まってきた。

「大丈夫？」

湊斗が彩羽に手を差し出す。

彩羽は差し出された手に掴まりながら、湊斗の顔を見上げて聞く。

「あの……私は一体なにと戦って、なにに負けそうなのでしょいか？」

ちっとも状況が呑み込めない彩羽の問いに、湊斗が一瞬キョトンとした後、クツと喉を鳴らして笑いを囁み殺す。彼は掴んだ手を引いて彩羽を立ち上げらせると、「それは後で話すよ」と、耳打ちしてきた。

急に顔を寄せられてドキツとするが、とりあえずこの件に関しては追及しないでおく。

彩羽が立ち上がるのを見届けて、桐子も立ち上がった。

「なかなか印象に残る就任演説になりましたね」

友岡が苦笑いを浮かべながら全員の顔を確認していく。

「……まずは、今後の業務について確認していきましょいか。その前に、前社長が指揮を執っていたプロジェクトについて、少し説明させてください」

友岡が彩羽に「いいでしょうか？」と、同意を求めてくる。

「お願いします」

「ではこちらで……」

友岡が広い会議用のテーブルを示すので、そこに移動した。

全員が着席すると、友岡がカラーコピーされた用紙を配っていく。

そこには、時計の写真がプリントされていた。でも画質が粗くて全容がわかりにくい上に、時計を隠すように赤字で「社外秘」と書かれている。

「最初に基本的知識の確認をさせていただきませんが、この部署は、昨年急逝された前社長が長年温め続けてきたプロジェクトを遂行するために発足されました。前社長である常葉正史氏は、来年迎えるトキコク創業百年の節目に向けて新規プロジェクトを指揮していましたが、急逝されたことで、プロジェクトは頓挫してしまいました」

その場にいた皆が頷くと、友岡が「しかしこの度、新社長のもと、プロジェクトの再始動が正式に決定されました」と、感慨深げに言う。

「やつと……」

彩羽の隣に座る湊斗が、そう呟くのが聞こえた。

「新社長である常葉忠継氏は、プロジェクト遂行メンバーを今までとは異なる方法で選考されました。ゴールデンウィーク頃に、全社員を対象にした社内アンケートがあったと思います。そのアンケートの結果によって選出されたのが、ここにいる私たちです」

友岡がそこで言葉を句切る。

確かにゴールデンウィーク頃、『百年先のトキコクに残りたいこと』というアンケートというか、作文を書くように求められた。

しかも、このアンケートの結果によっては、社員全員に昇進のチャンスがあると聞き、出世を夢見て熱心に取り組む者もいた。だが彩羽は、仕事の一環として当たり障りのない言葉を並べただけ。それなのに、何故か彩羽が部長に抜擢され、今回のプロジェクトを任されることになってしまったのだ。

——アンケートの結果で選出されたって、全然納得できない……

彩羽自身がそう思っているのだから、きつと全員が思っていることだろう。

「牧瀬部長をはじめ、ここにいる人たちはプロジェクト遂行のために選ばれた人間です。決して、新島さんの言うような負け組の島流しではありません」

力強く言った後、「と、私は信じています」と、友岡が付け足した。

その場にいる誰もが神妙な顔をする中、控えめに水沢が発言する。

「つまり、どう思っこの仕事に取り組むかは、自分次第ってことですか？」

「そうなりますね」

友岡が目尻に皺を寄せて穏やかに頷くと、ふと空気が和んだ気がした。

——水沢さんの言うとおりだ。

わけがわからないことだらけだけど、これが今自分に与えられた仕事ならば、前向きに取り組むたい。

「力不足なのは重々承知していますが、私にも出来ることがあると信じたいです」
そう口にした彩羽は、チラリと桐子の様子を窺う。

テーブルを挟んで彩羽の斜め前に座る桐子からは、初対面の時のような攻撃的な雰囲気は感じられない。ただ、無表情で黙り込み、彩羽と目が合わないようにしている。

——私が上司って、やっぱり無理があるよね。

仕方ないことだけど、受け入れてもらえないことについて落ち込んでしまう。

友岡は、全員の顔を見回して説明を再開する。

「次に、プロジェクトの詳細についてお話しします。トキコクはこれまで、男性向けの高級腕時計を商品の主軸にしてきました。女性向けは、男性向けのサイズ違いでスポーツタイプが数パターンある程度。しかし前社長の中には、長年、女性向けの高品質な時計を手掛けたという思いがあり、トキコク創業百周年を機に、女性向けの時計の製造販売に着手する予定でした。これがそうです……」

そう言って、友岡が最初に配った紙を掲げる。

「正式名称は『バルゴ・オービット』。正義と天文の女神である乙女座から名前を取りました」

「ぼんやりして、よくわからないわね」

黙り込んでいた桐子がぼつりと呟く。その声に友岡が理由を説明した。

「再来週までは、ここにいるメンバーにも詳細を明かせない決まりなので。この中でバルゴの詳細を知っているのは、私と香月さんだけです、バルゴは間違いなくいい時計です」

その言葉に、自然と視線が湊斗に集まる。ずっと黙って話を聞いていた湊斗が、頷いて口を開いた。その表情は、社長秘書をしていた頃と変わらない自信に満ちている。

「ご存知のとおり、私は前社長の秘書としてこのプロジェクトに深く関わってきました。もともと技術開発部に所属されていた友岡さんも、このプロジェクトの初期メンバーの一人です。その関係で、我々は、皆さんより早くバルゴに触れる立場にいました」

「ああ……なるほど」

納得する桐子の隣で、水沢が目を細めたり、紙の角度を変えたりしてカラーコピーを眺めている。そんな水沢に代わり、桐子が「バルゴとは、どんな時計ですか？」と湊斗に聞いた。

「祖父は常々、バルゴはこれからのトキコクを背負う商品になると話していました。私もそう確信しています。実物は、二週間後の牧瀬部長の就任会見で見られる予定なので、それまでのお楽しみというだけで」

そう話す湊斗の自信に満ちた艶やかな表情に、彩羽だけでなく桐子の頬も心なし赤くなる。

でも次の瞬間、彩羽は「ん？」と、瞬きをした。

「今、私の就任会見……って、言いましたか？」

徐々に顔色を変える彩羽に、湊斗は「言いましたよ」と、にこやかに頷く。

「二十代の女性管理職の誕生。それは、貴女が思っているよりずっと世間の注目を集めるニュースです。社長は話題作りのために、牧瀬さんの部長就任を大々的にアピールするつもりなのでしょう。辞令が出て間もないですけど、すでに経済誌数社から単独取材の申し込みが来ますよ」

「はいいつ？」

湊斗の言葉に、彩羽が頬を引き攣らせる。

「私……そんなこと、一言も聞いてませんけど」

「だから今話しました。部長の初仕事なので、頑張ってください」

湊斗がにこやかに返してきた。表情こそ穏やかだが、有無を言わせない圧力を感じる。

「……っ」

部長の仕事と言われてしまつては、彩羽に放棄することはできない。

頬を引き攣らせたまま硬直する彩羽に、桐子が「頑張ってくださいね」と、若干の同情と励ましを混ぜたエールを送ってくれた。最初に厳しいことを言われただけに、その一言で随分救われた気になる。

「頑張ります」

そう言うしかない。ここまで来たら、覚悟を決めるしかないのだから。

「あの……」

そこで、水沢が遠慮がちに手を挙げた。

「どうぞ」

発言を促す湊斗に、水沢がおずおすと口を開く。

「この部署が、前社長の手掛けたプロジェクトのために立ち上げられたというのにはわかりましたけど、そのために僕たちは、それぞれなにをすればいいんですか？」

水沢の質問に、湊斗がゆっくりと頷いた。

「この部署に課せられた一番の仕事は、バルゴ・オービットの販売ルートを確保することです」

「それは、技術畑にいた僕や友岡さんに、営業回りをしろつてことですか？」

唸るような声を出した水沢が、困った様子で眼鏡のフレームをいじる。

確かに、ずっと技術畑にいたのなら、突然営業を命じられても困るだろう。

水沢の疑問に答えることなく、湊斗はさらに言葉が続けた。

「社長の意向として、バルゴ・オービットはトキコクの既存の販売ルートを使わず、新しい販売ルートを開拓して欲しいとのことですよ」

「えっ!? どうしてですか？ 既存の販売ルートを使った方が確かじゃないですか！」

そう驚きの声を上げたのは、桐子だ。

「忠継社長は、バルゴ・オービットの製造販売における全てを、新しい分野への挑戦と捉えているようです。そのため、既存の販売ルートに頼ることなく、販路も一から開拓して欲しいとのことでした。既存概念に囚われないアイデアを引き出すために、あえて営業経験のない者ばかりを集めたのかもしれないね？」

嘘か本当かわからない友岡の言葉に、湊斗以外の三人が言葉を失う。

普通に考えて、販路なんてそう簡単に新規開拓できるとは思えない。さらなる無茶振りに、頭を抱えなくなった。そんな彩羽の脳裏に、先ほどの水沢の言葉が蘇る。

『どう思つてこの仕事に取り組むかは、自分次第』

文句を言っている先には進めない。ならば、この状況を受け入れ前に進むしかないのだ。

「じゃあ、当面の仕事は、自分たちなりにバルゴの販売ルートを検討していく、ということではないですか？」

彩羽が、友岡、湊斗のどちらともなく問いかけると、二人共が頷いた。

その後は、今後の仕事についての擦り合わせや、お互いが元の部署でどういった仕事をしていくかという情報交換をする。その内に、終業時刻になった。

すると友岡がいち早く帰り支度を始める。

——慌ただしい……

さつきまで穏やかに話していた人とは思えない、友岡の手際よい帰り支度に驚く。そんな彩羽の視線に気付いた友岡が「妻の病院に行かないとならないので」と、説明する。

「奥さん、どこかお悪いんですか？」

なにげなく発した彩羽の言葉に、友岡が支度の手を止めて言った。

「ええ、長患いで入院しています」

その表情がなんとも寂しげだ。

「あ……すみません」

——プライベートに踏み込んでしまった。

咄嗟に謝る彩羽に、友岡が「隠しているわけじゃないので」と、柔らかく微笑む。

「それに、皆さんにも知っておいていただいた方がいい話ですから。技術部にいた頃もそうでした

が、妻の介護があるので定時で帰らせていただくと思います。皆さんにも迷惑をかけてしまうかと思いますが、よろしくお願いします」

「わかりました」

彩羽が答えると、他の三人も頷く。

「でも、立ち上げ時から携わってきたこのプロジェクトに、縁あって再び関わる事ができて幸せです」

感慨深げに話す友岡は「それでは」と、その場にいる一人一人に頭を下げてから部屋を出ていった。

それを見送り、桐子、水沢の順に部屋を出ていくと、彩羽と湊斗が部屋に残された。

この後の行動に迷う彩羽に、帰り支度をした湊斗が近付いてくる。

「じゃあ、食事でもしながら二人でゆっくりこれからのことについて話しましょうか」

少し前の自分なら、憧れの王子様と食事なんて緊張して舞い上がっていただろう。けれど、今はそれどころじゃない。

昨日からわけのわからないことの連続だ。聞きたいことはたくさんある。

「はい。よろしく願います」

覚悟して頷く彩羽に、湊斗は綺麗に微笑んだのだった。



湊斗に案内されたのは、看板のない路地裏の小料理屋だった。

屋号を書いたのれんが下げられていなければ、町屋造りの民家にしか見えない外観だ。けれど、中に入ると、すぐに白木の一枚板のカウンターが目飛び込んでくる。さらに奥にも幾つか座敷があるようで、しつかりした造りの店だとわかった。

湊斗を見るなり、カウンターの中の板前が「お待ちしておりました」と声をかけ、手の動きでカウンターの一番奥の席に座るよう促してくる。

並んで席に腰を下ろすと、湊斗が「とりあえずビールでいい？」と、彩羽に確認してきた。戸惑いながら頷くと、彼は慣れた様子でビールを頼んだ。

すぐに冷えたグラスと瓶ビールが運ばれてきて、湊斗が彩羽のグラスにビールを注ぐ。

慌てて彩羽が湊斗から瓶を受け取るうとするけれど、湊斗はそれを手の動きで断り、手酌で自分のグラスにビールを注いだ。

「とりあえず、部長就任おめでどうございます」

「ありがとうございます」

なんだろう……素直に喜べないものがある。

とんでもない辞令なのはわかってはいたけど、今日一日勤めただけでも不安は募る一方だ。

釈然としな顔の彩羽に、湊斗が楽しげな視線を向けてくる。

「部長就任の辞令を受けてどう思った？」

急にくだけた彼の口調に戸惑いつつ、彩羽は騙し討ちのような辞令告示から今までのことを思い浮かべた。

仲のいい同僚たちからは宝くじに当選したようなノリで「入社三年の女性社員。事務職から異例の部長昇進」と騒がれたけど、中にはあからさまに厳しい態度を取ってくる人もいた。

平々凡々として出世欲がないように見えた総務部の係長でさえ、彩羽が彼を飛び越えて部長になった途端、態度が豹変したのだ。真剣に出世のチャンスを狙っていた人たちには、受け入れがたい人事だったのだろう。

「いくら男女平等社会とはいえ、この人事はあり得ません。自分で言うのもなんですが、私、いたって平凡な社員なんです」

「逆に、忠継社長が指揮を執る新体制のトキコクでは、そんな目立たないごく普通の社員でも、頑張り次第では出世できるということだ。同時に、俺のような社長の血縁者でも、場合によっては降格される。つまり今回の辞令は、この会社では誰にでも平等に出世のチャンスがあるというアピールになっただけじゃないか？」

「香月さんは、社長の血縁者だからじゃなく、きちんと仕事を評価されて社長秘書を任されていたんだと思います」

信頼を感じさせる前社長と湊斗のやりとりを思い出し、彩羽はそう断言する。そして「それ

に……」と、言葉を続けた。

「あのアンケートで、私が選ばれるのはやっぱりおかしいと思っんです。それこそ、新島さんが言っていたみたいに、無力でどこにでもいそうな社員だから選ばれた、という方がよほどしっくりきます。なんだか本当に、私が失敗して笑われればいいという悪意があるみたいに思えてきました……」

どんなことでも、与えられた仕事は精一杯頑張りたいと思う。だけど、今回の件はさすがに自分の範疇を超えている。

思わずぶつちやけた彩羽の意見に、湊斗が笑みを深めた。

「正解」

「え……？ 正解って……」

思っていたことは本当だけれど、それをあっさり認められてしまうと、どう受け止めたらいいいのかわからなくなる。

戸惑いの表情を浮かべる彩羽に、湊斗が静かに口を開いた。

「ただしその悪意は、君じゃなく、俺に向けられたものだけだ」

「えっ？」

驚く彩羽に、湊斗が「順を追って話そうか」と、グラスを持ち上げて残っていたビールを飲み干した。

「前社長である常葉正史と、現社長である常葉忠継は親子だ。でも二人の関係は、修復が不可能

なくらい悪かったんだ。私生活においてもビジネスにおいても、二人はことあるごとに衝突していた」

「……はっ」

トキコクの社員なら気付いていたよね。そう視線で問いかけてくる湊斗に、彩羽は頷き返す。

事実、前社長と現社長の関係が険悪であることは、社員なら誰もが知る話だ。

「まあ、そこに至るまでにはそれなりに家族の歴史があるんだけど……。ここ数年、トキコクの経営方針に関する二人の対立は顕著だった。堅実な販売と地道な技術開発に重きを置く祖父の考えは、伯父には時代遅れに映ったのかもしれない。伯父はことあるごとに、祖父の経営方針に否定的な態度を取り続けた」

なにかを思い出しているのか、湊斗は深いため息を吐く。

「……」

かける言葉を見つけれずにいる彩羽に、湊斗は苦く笑って話を再開する。

「だから祖父が長年温めてきた今回のプロジェクトにも、伯父は猛反対だった。それでも俺をはじめとする社長派の人間は、このプロジェクトが百年先のトキコクの利益になると信じて、開発を押し進めてきた。そんな中、祖父が亡くなり、それに乗じた伯父によってプロジェクトは凍結されてしまったんだ」

「あの、前社長が亡くなった後、香月さんが社長になることはできなかったんですか？」

社員の間にも、湊斗が次期社長になるといふ噂は聞こえてきていた。

「トキコクほど大きな企業になると、そこで働く人の数だけ様々な利害関係や思惑が働く。これま
どどおり高品質な時計作りを追求する祖父の理念に賛同する者もいれば、利益効率を優先する祖父
の賛同者もいる。祖父が急逝した際、経験不足の俺ではなく、序列を踏まえて祖父を社長に推す声
が強かった」

「でも、社長秘書から降ろす必要はなかったんじゃないですか？」

思わず疑問を口にした彩羽を樂しそうに眺めて、湊斗が言う。

「伯父には、俺を排除したい理由があったのさ」

「排除したい理由？」

「祖父はこうした事態に備えて、事前に遺言書を残していた。祖父の保有するトキコクの株を全て
俺に相続させることで、俺をトキコクの筆頭株主にしたんだ。それにより、経営権は伯父が持つて
いても、伯父の社長任命権は俺に委ねられたのさ」

「ええっ、そうなんですかっ!？」

筆頭株主という大きな話に驚くが、一瞬遅れて素朴な疑問が浮かんできた。

彩羽は小さく手を挙げ、あの……と、その疑問を口にする。

「香月さんがトキコクの筆頭株主なら、大株主として社長を解任することが出来るんじゃないんで
すか？」

詳しくは知らないが、筆頭株主なら株主総会を開いて社長を解任することが出来るんじゃない
のか。

しかし湊斗は「世の中そんなに簡単に出来てないよ」と、肩を竦める。

「確かに解任は可能だけど、会社法三三九条一項では『役員及び会計監査人は、いつでも、株主総
会の決議によって解任することが出来る』と規定すると同時に、二項で『前項の規定により解任さ
れた者は、その解任について正当な理由がある場合を除き、株式会社に対し、解任によって生じた
損害の賠償を請求することが出来る』とあるんだ」

「はあ……」

ほとんど理解できず、問の抜けた声を出す。そんな彩羽に、湊斗が丁寧に説明してくれた。

「つまり、俺が伯父さんを解任したとしても、そこに正当な解任理由がなければ、伯父さんから逆
に訴訟を起こされるといことだ。もしそんなことになったら、トキコクのブランドイメージを汚
すことになる」

「ああ……」

「だから俺は、簡単に伯父を解任できない。同時に伯父も、筆頭株主である俺が目障りで仕方ない
が、社長解任権を行使されるのは困るってわけ」

「なるほど……」

そこで彩羽はハツとして、思い出したように周囲を窺う。

しかし、自分たちが座るカウンターに他の客の姿はなく、背後の座敷にも人はいなかった。

「人に聞かれる心配がないように、あらかじめ席を押さえているから心配しなくていいよ」

「——っ!」

湊斗の一言で、この席だけでなく周りの席まで彼が押さえているのだと理解した。

呆然とする彩羽に、湊斗は話を再開させる。

「祖父の残したプロジェクトをみすみすお蔵入りさせるわけにはいかない。これまでそれに時間を費やしてきた全ての人の気持ちを無下にすることになる。だから俺は、祖父のプロジェクトを再始動させるために、伯父にある賭けを申し出た」

「賭け……ですか？」

「そう。祖父が残したプロジェクトを再始動させることと引き換えに、もしそれが失敗したら、祖父から譲渡されたトキコクの株を放棄して会社を辞める、という条件を呑んだんだ。俺の存在を疎ましく思っていた伯父には、まさに渡りに船だったんだろうな。その賭けを受け入れて、俺にさらなる条件を突きつけてきた」

「ど、どんな条件ですか？」

なんとなく嫌な予感を感じながら尋ねた彩羽を、湊斗が指さす。

「一年以内に結果を出すことと、君だよ。……というより、祖父のプロジェクトを再始動するため新規部署を立ち上げるのは認めるが、その人選を伯父に一任するって条件で、伯父は賭けに乗ると言ってきたんだ」

「はいっ!？」

「経歴に関係なく全ての社員にチャンスがある……なんて耳に心地いい言葉を掲げながら、その実、平凡な社員を部長に据えて、このプロジェクトが失敗するのを狙っているんだ」

「そんな……」

今回のあり得ない人事の真相に愕然とする。自分の両肩にはとんでもないものが乗っかっているのではないか……。そう意識した瞬間、彩羽は思わず自分の肩をはらうけれど、そんなことをしてどうにかなる問題ではない。

まさかトキコクの行く末と湊斗の進退まで、自分が背負っているとは思わなかった。

「なんでそんな無謀な賭けを申し出たりしたんですか……!？」

「ん、賭けに勝てば問題ないと思って」

「そんな！……なにを根拠に」

自分には荷が重い……と、悲鳴にも似た声を上げる彩羽に、湊斗が強気な笑みを浮かべる。

「バルゴ・オービットは自信を持っていい商品だと言える。だからこそ、どんな無茶な勝負に出ても、あれを世に出す価値があると思ったんだ」

「ああ……」

そうだ。湊斗が絶対の信頼を置いているのは、前社長が残したプロジェクトとバルゴであって、賭けの条件として押しつけられた自分ではない。

当然と言えば当然のことなのに、なんだか悔しいと思ってしまう。なんともいえない思いを抱えて、彩羽は湊斗に聞いた。

「これからどうするつもりなんですか？」

「もちろん、バルゴを世に出すのさ。そして、祖父の判断が間違っていなかったこと、バルゴの開

発に携わった人たちの努力は無駄じゃなかったことを証明する」

強気に話す湊斗が「そうじゃないと、彼らに失礼だ」と、小さく呟いた。

その横顔に、彼の静かな覚悟を感じる。

しかし、どれだけバルゴが優れた商品だとしても、彩羽にはかなり無謀な賭けに思えた。

だが、湊斗がそこまで強く願っているのであれば、自分になにができるかわからないけれど、彼に協力したい。

「バルゴを世に出す。それが出来れば、香月さんは満足ですか？」

そう問いかけると、湊斗が「まさかっ」と、眉を上げる。

「賭けには勝つ。そして、伯父からトキコクの経営権を奪うつもりだ」

「はい？」

法律的な問題があつてそれは難しいと、さっき自分で話したばかりではないか。

戸惑う彩羽に、湊斗は力強い声で宣言した。

「伯父がどういう人間か知っているからこそ、彼にトキコクを任せるわけにはいかない」

「……？」

「伯父は、有名企業の経営者の家に生まれたのは、宝クジに当たったようなものだと考えている。長い時間をかけて築き上げてきたトキコクのブランドネームを、労せず収益を生む打ち出の小槌かなにかと勘違いしている。そしてその打ち出の小槌で生み出した利益は、自分だけのものだと思っているんだ。そんな人間に、百年近くも続いたトキコクの未来を任せるわけにはいかないからね」

確かに忠継社長が経営するようになってから、なんとなく会社にピリピリした空気が漂っているような気がする。前社長が生きていたら、忠継社長が会社を任されることはなかっただろうと話す社員もいるくらいだ。

「だから俺は、この賭けに絶対勝たなくちゃならない」

強い決意を感じて言葉を失う彩羽に、湊斗がA4サイズの封筒を差し出した。

「なんですか？」

湊斗に促されて中を確認すると、大手企業のパンフレットや会社概要が複数収められている。

視線で意味を問いかける彩羽に、湊斗が綺麗な笑みを浮かべながら言った。

「好きな会社を選んで」

「え？」

「どの会社も、今までと変わらない労働条件で君を受け入れてくれる」

「どういうことですか？」

意味がわからず、彩羽はキョトンとする。

「どうしても無理だと思うなら、そのどこかに転職するといいいよ」

「……私が部長だと、迷惑ですか？」

昨日は彩羽を受け入れてくれたような口調だったけれど、やはり実際は、荷が重いと思われるていたのかもしれない。落胆する彩羽に、湊斗がゆっくりと首を横に振る。

「違うよ。俺は、どんな人間が来ても受け入れる覚悟はできていた。これは、君の問題に対する保

「険だよ」

「私の……問題の保険、ですか？」

「そう。君に能力があるうとなかろうと、部長になるならそれなりの覚悟がいる。無理なら深入りする前に、逃げ出した方がいい」

部長は誰でもいい。だから彩羽でもいい——その面と向かって言われて面白くはない。けど、言いはどうあれ、この提案は彩羽の立場を配慮してくれていることだろう。

「……」

「どうする？ 逃げる？」

——逃げるって……

湊斗は、どこか挑戦的な視線を彩羽に向けている。なんだか、彩羽の覚悟を試しているように感じた。

静かに呼吸を整えて、彩羽は「これは、結構です」と、一度は受け取った封筒を湊斗に突き返す。「秘書の常葉さんに、あれだけ大きなことを言っておいて、自分だけ逃げ出すなんて恥ずかしくて出来ません」

そう言っ封筒を返すと、湊斗はあつさりとそれを受け取った。

「そう。それは残念」

残念と言いながらニンマリと微笑む湊斗は、初めからこの結果を予測していたのかもしれない。

——香月さんって、意外に腹黒いのかな……

ずっと憧れていた素敵な王子様は幻想にすぎなかったのかと、心が萎みかける。

そんな彩羽に湊斗が「まあ、よかったよ」と、再びグラスにビールを注いで口を付けた。

「それは、どういう意味のよかったですか？」

和然とした気持ちの彩羽に、湊斗が言う。

「覚悟はしていたけど、できることなら、能力もないのに部長風吹かして、部内を掻き回すような奴じゃなきゃいいと思っただ。でも今日、圭太に真っ向から嘯み付く君を見て、君の部下になるのも面白いと思っただ」

「……」

これは褒められているのだろうか……

判断に困っていると、湊斗が艶やかな笑みを浮かべた。

「君が残ってくれてよかったよ」

「……っく」

——ずるい。

彼は、どうやら本気で彩羽が残ったことを歓迎してくれているようだ。

湊斗は、自分が思っていたような優しい王子様ではないのかもしれない。でも、そんな色っぽい顔で微笑まれたら、それだけで心臓が悲鳴を上げる。

イケメンはきつと、本能的に笑顔の活用法を承知しているのだろう。じゃなかったら、こんなにも簡単に人を下キドキさせられるはずがない。

頬が熱くなっているのは、アルコールのせいだ。自分にそう言い聞かせ、彩羽はビールを一気に飲み干す。すると、すかさず湊斗が空のグラスにビールを注いでくれる。そして自分のグラスを彩羽のグラスに当てて「これからよろしく」と、また艶やかな笑みを向けてくるから、たちが悪い。

彩羽は覚悟を決めて、再びビールを呷ったのだった。

2 手のひらの宇宙

その週の金曜日。彩羽が出社するとすでに湊斗が仕事をしていた。

「おはようございます」

「早いね」

彩羽が声をかけると、顔を上げた湊斗と目が合う。

——早いねって……

「香月さん……ちゃんと家に帰ってますか？」

思わず確認してしまう彩羽に、湊斗が笑った。

「もちろん帰ってるよ。自宅が会社に近いから、みんなより早く早く着くだけだ」

そう言うと、湊斗はすぐに視線をデスクに戻す。

自分のデスクに鞆かばんを置いた彩羽は、それとなく湊斗の様子を窺った。

配属初日に一緒に食事をした時以外、湊斗は毎日、誰より早く出社して、いつも最後まで残っている。それに気付いてからは、彩羽もなんとなく早めに出勤するようにしていた。

彩羽もなにかしようと思うのだが、デスクの上に置かれている書類はすでに何度も目を通したも